

農作物技術情報 第4号 野菜

発行日 令和3年 6月 24日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 全 般 降雨への事前対策として排水対策を徹底しましょう！
- ◆ 施設果菜類 換気の徹底、適切な肥培管理・水分管理と病害虫防除を！
- ◆ 露地果菜類 生育に応じた整枝・摘葉管理と病害虫防除を！
- ◆ 雨よけほうれんそう 天候の変化に応じた適切な管理と病害虫防除を！
- ◆ 露地葉菜類 病害虫防除の徹底と計画的な作業により良品出荷を！

1 生育概況

- (1) 施設果菜類は順次収穫が行われています。生育は概ね順調ですが、きゅうりでは成り疲れによる草勢低下が見られます。トマト、ピーマンでは尻腐果など障害果の発生が見られます。病害虫では、アザミウマ類やアブラムシ類の発生が目立ちます。
- (2) 露地果菜類の定植は6月上旬までに終了し、一部で定植後の乾燥により生育が遅れた圃場が見られましたが、概ね良好な生育です。病害虫では、灰色かび病、アブラムシ類、アザミウマ類の発生が見られます。6月中旬の降雹により、露地果菜類の一部圃場において茎葉の傷みが見られています。
- (3) 雨よけほうれんそうの生育は概ね順調です。アブラムシ類、アザミウマ類、タネバエ、コナダニ類等のほか、一部で萎凋病、白斑病等の病害虫が見られます。
- (4) 高冷地キャベツは、平年並みの6月下旬から出荷開始の見込みです。コナガやタマナギンウワバの発生が見られます。高冷地レタスの生育は概ね順調ですが、一部作型で低温による生育遅延があります。菌核病やすそ枯病、灰色かび病の発生が見られます。ねぎの生育はおおむね順調で、順次秋どり作型の定植が進められています。ネギアザミウマ、ネギハモグリバエの被害が見られ、一部地域ではべと病や小菌核病も発生しています。キャベツ、レタス等の露地葉菜類の一部圃場において、6月中旬の降雹による葉の傷みが見られています。

2 技術対策

(1) 梅雨期の降雨、降雹への対応

降雨によって泥はねが発生すると病害の感染源となりますので、天候回復後に殺菌剤の予防散布を行います。集中豪雨などで圃場に滞水した場合は、速やかに排水を促し、通路の中耕等により根に酸素を供給するなどして草勢の回復を図ります。また、局地的な豪雨に備え、明渠や暗渠の末端部分の詰まりなど排水対策の再確認を行います。降雹被害のあった圃場では、殺菌剤や液肥の葉面散布、果菜類での主枝更新（側枝利用）を行います。

(2) 施設果菜類の管理

ア きゅうり

半促成栽培、早熟栽培とも上位葉が繁茂すると、群落内の採光性・通風性が悪化し、光合成量

が減少するため、45～50日経過した葉を中心に積極的に摘葉を行います。草勢維持のため、株当たり一度に2～3枚以内を原則としますが、主枝葉が25枚程度展開したあとであれば、一度に5枚程度摘葉しても問題ありません。特に伸ばす枝がある場合は、周囲の葉を先に摘葉します。

病虫害防除では、べと病、灰色かび病、アザミウマ類、アブラムシ類等の防除を基本とした薬剤を選定し、適期防除に努めます。梅雨時期はべと病等の発生が多くなるため、換気を行い、湿度を下げる傾向にあります。極端な低湿度は光合成抑制及び茎葉伸長抑制につながります。そのため、適正なかん水管理やミスト散布を行い、適度な湿度を維持するように留意します。

また、土壌病害であるキュウリホモプシス根腐病は、気づかないうちに根が感染している場合があります。生育中に萎れが発生していないかどうかを観察し、疑わしい症状が見られる場合は、最寄りのJAまたは農業改良普及センターへお問合せください。

イ トマト

雨よけ栽培では収穫が始まり、草勢のバランスを崩しやすい時期に入ります。例年、着果負担から草勢低下を引き起こしている事例が見受けられますので、適正な摘果管理を行うとともに、着果量や生長点付近の状態（生長点の大きさ、葉色、葉の巻き具合、茎の太さ）を確認しながら、適切な追肥、葉面散布、灌水により草勢を維持することがポイントになります。つる下げ作業も、一気に下げると極端に草勢を落としますので、こまめに作業を行います。

病虫害防除では、灰色かび病、アザミウマ類、アブラムシ類等の防除を基本とした薬剤を選定し、適期防除に努めます。梅雨時期は灰色かび病等の発生が多くなるため、換気を行い、湿度を下げる傾向にあります。極端な低湿度は光合成抑制及び茎葉伸長抑制につながります。そのため、適正なかん水管理やミスト散布を行い、適度な湿度を維持するように留意します。

土壌病害の発病株は速やかに抜き取り処分するとともに、かいよう病や青枯病等の汁液伝染する病害についてはハサミや手袋などをこまめに消毒しながら作業し、圃場内での二次伝染を最小限に抑えます。特に曇雨天時のわき芽かき作業は、病気を伝染させる場合がありますので、晴天時に作業します。

ウ ピーマン

4本仕立ての整枝法は、「京ゆたか」では主枝第10分枝まで側枝3～4節摘心、主枝第11分枝以降は側枝2節摘心が基本です。「京鈴」「さらら」等の草勢が弱い品種は、下段側枝を2節程度で摘心し着果数を制限するとともに、灌水と追肥は少量多回数とし、草勢を低下させないよう管理します。曇天が続いたり、側枝の着果負担が多く草勢が低下する場合は、ふところ枝の摘除や側枝の着果数を減らすなどして、主枝の伸長を促進します。

また、圃場への浸水や多灌水により株元が過湿になると疫病が発生しやすく、逆に乾燥してくると尻腐果が発生しやすくなります。pFメーターを目安とした水分管理を行うとともに、株元を乾かすような管理を心がけます。なお、pFメーターの指示値は2.0を目安とします。

病虫害防除では、灰色かび病の発生が多くなる時期です。適切な整枝管理と肥培管理で過繁茂を避け、適期収穫で草勢の維持に努めること。可能な範囲で発病部位を除去し、薬剤散布を適期に行います。

エ 夏期高温期の昇温抑制対策

夏期高温に備え遮光幕や塗布型遮光剤を利用する場合には、資材の種類や使用濃度により効果や持続性に差が出ますので、使用方法を十分確認します。また、できるだけハウス内に熱気がこもらないように、ハウスの肩より上部での換気実施やツマ面の開放を行います。梅雨明け後は通路への散水や敷きわら等も地温やハウス内気温の昇温抑制に有効です。また、近年ではハウス内の乾燥対策、高温抑制を目的にミストの活用も始まっていますので、興味のある方は農業改良普及センターにご相談ください。

(3) 露地果菜類の管理

ア きゅうり

本格的な収穫を迎える時期となりました。収穫量に応じた追肥と灌水で草勢を確保します。特に乾燥気味の圃場では、灌水や敷きわらなどで土壌水分の保持を図ります。

1 本仕立ての場合の生育中期～盛期における基本的な整枝、摘葉管理は表1を参考に行いますが、品種や草勢により管理技術は異なりますので、あくまでも目安としてください。2 本仕立ての場合は、主枝8～10節から発生する側枝を1本伸ばします。それ以外の主枝10節までの側枝は1節摘心とし、主枝11節以降は2節摘心または半放任とします。いずれの仕立て方法の場合でも、初期生育が劣り側枝の発生が鈍い場合は強剪定を避け、根の発生を促すように管理します。なお、降雹被害により主枝が折れた株は、勢いの良い側枝を選択し、主枝として誘引します。

病害防除では、7月はべと病や褐斑病、炭そ病等の斑点性病害の予防に重点をおきます。特に炭そ病や褐斑病は、例年発生が見られる7～10日前からの予防散布が重要です。また、薬剤散布による防除だけでなく、蔓延を防ぐため疑わしい病斑が見られたら積極的に摘葉し、速やかに圃場外で処分します。土壌病害であるキュウリホモブシス根腐病は、気づかないうちに根が感染している場合があります。生育中に萎れが発生していないかどうかを観察し、疑わしい症状が見られる場合は、最寄りのJAまたは普及センターへお問合せください。

害虫防除では、アブラムシ類やハダニ類等の防除を実施します。特にアブラムシ類は、定植時に施用した粒剤の効果が切れてくる時期ですので、早めに薬剤散布を行います。

表1 露地きゅうり(1本仕立て)の生育中期～盛期の整枝、摘葉方法(例)

	子づる	孫づる	整枝のポイント	摘葉のポイント	その他
上段	1節摘心	半放任とし、混み合った部分のみ摘心する	1. 親づるは、生育が順調な場合は支柱の肩の部分で止めるが、上段の子づるの発生が悪い場合、発生が緩慢な品種、親づるの芯が小さい場合は遅く止める	1. 台木や穂木の子葉は摘除する 2. 病葉や老化葉を優先的に摘除するが、子づる、孫づるの生長点を覆っている葉を株当たり2～3枚/回を目安に除去する	放任枝とネット沿いに発生した子づるはテープナーでしっかり止めるが、それ以外の枝は誘引せずきゅうり全体に光が当たるよう樹を立体的に仕上げる
中段	2節摘心	1節摘心ただし、草勢が弱い場合は早止めしない	2. 親づるの摘心後、草勢維持のため放任枝を2～3本残す。作業しやすいように腰～肩の範囲に子づるを張らせる。中段の子づるは収穫後1節残して切り戻す	3. 膝から下は摘葉し、通風を良くする 4. 親づるの摘葉は親づるの摘心後1ヶ月間を目安に終了する	
下段	1節摘心	1節摘心	3. 膝から下の子づる、孫づるは収穫後親節から切り戻す		

※下段：～10節程度。中段：11～20節程度。上段：21節～

イ ピーマン

整枝は、側枝は放任とし、繁茂状態になる時は受光量を高めるため、ふところ枝と徒長枝を間引き剪除します。なお、降雹被害により主枝が折れた株は、下枝が伸びるのを待ち、主枝として誘引します。露地栽培でも、降雨が少なく土壌が乾燥している時はかん水チューブなどによるかん水や、通路かん水などの対策を実施します。近年では露地栽培でも点滴かん水装置などのかん水設備の導入が行われるようになり、尻腐果の被害軽減などに効果を上げています。

梅雨時の曇雨天が続くと灰色かび病に注意が必要です。また、定植時に施用した殺虫剤の効果が切れる時期になるので、アブラムシ類やアザミウマ類の防除を行います。さらに、7月下旬にはタバコガに注意します。

(4) 葉菜類の管理

ア 雨よけほうれんそう

梅雨に入り、圃場内への雨水の流入やハウス内が過湿になりやすくなるので、圃場周囲の排水対策を徹底します。また、低温・日照不足から高温・多照へ天候が急変することが多くなります。換気や遮光を遅れずにタイミングよく行い、萎れや徒長を防ぎます。

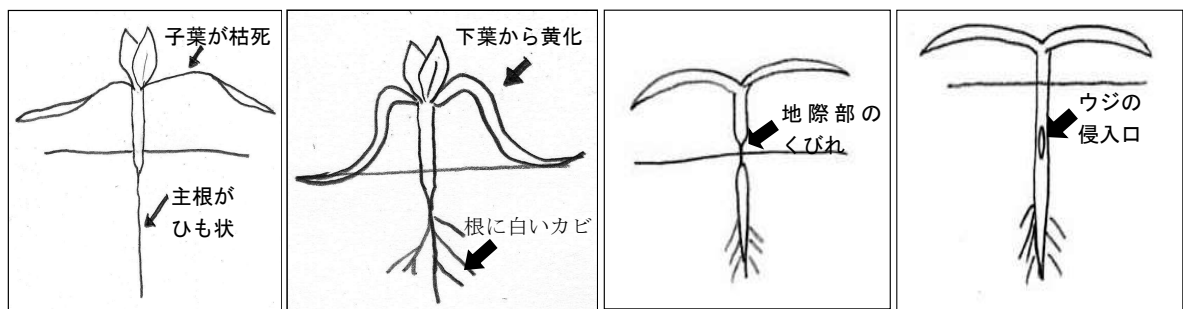
高温になり、ほうれんそうの生育には厳しい時期になりますので、各産地で選定している夏播き用の品種を利用し、必要に応じて生育中のかん水を積極的に行います。

引き続き、べと病が発生しやすい時期です。ハウスの換気に努めるとともに、株間を広くして風通しを良くし、被害株は随時抜き取り処分します。例年発病が多い圃場では、殺菌剤の予防散布を徹底します。

一部で白斑病の発生が見られます。発病が多い圃場では、効果のある殺菌剤を播種7日後頃から7日間隔で3回程度散布します。

この時期に発生する生育初期の立枯症状の多くは、土壤病害や高温障害、タネバエ等が原因です。見分け方は図1を参照してください。土壤病害の発生が多い圃場では、計画的に土壤消毒を実施します。

また、アブラムシ類やアザミウマ類、タネバエ等の害虫の発生に注意しながら、粒剤等による予防防除や発生が見られた場合に効果のある殺虫剤の散布を行います。



根腐病の症状

萎凋病の症状

高温障害の症状

タネバエによる被害

図1 ほうれんそう生育初期の立枯症状の見分け方

イ キャベツ

コナガやタマナギンウワバ等の害虫の発生が増える時期を迎えています。定植時の薬剤の利用を徹底するとともに、防除が遅れないように注意します。コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を基本とします。なお、岩手県内でジアミド抵抗性コナガの発生が確認されていますので、ジアミド系の薬剤は1作型1回の使用に留めるほか、年間の使用体系を考慮して使用します。

また、収穫が終了した圃場で残渣をそのまま放置すると害虫の発生源になりますので、収穫後は早めに圃場を整理します。

結球期に降雨が続くと株腐病の発生が多くなります。結球開始期から株元にも十分薬液がかかるように薬剤散布を行います。また、圃場の排水対策についても確認します。

ウ レタス

気温の上昇、降水量の増加にともない、すそ枯病、軟腐病、腐敗病等の腐敗性病害や灰色かび病の発生が多くなります。特に大雨が引き金になって、病害が多発する場合がありますので、気象情報等を参考にして、降雨の前後に重点を置いた防除とします。また、これから定植する作型では、排水の良い圃場を選んで作付けするとともに、前作の残渣を圃場外に持ち出す、地温を抑

制するマルチを利用する、適湿の時にマルチを張る等の対策を心がけます。

高温期の過剰施肥は、変形球や腐敗の発生を招きやすいので、品種に応じた施肥量にするとともに、適期に収穫して品質の向上に努めます。

エ ネギ

生育に応じた追肥、土寄せにより葉鞘の伸長を促します。特に早出しを狙う作型では、無理に土寄せを行い葉鞘が細くならないように注意します。今後、降水量の増加が予想されますので、圃場内に水がたまらないよう、圃場の排水対策を確認します。

また、大雨直後に土寄せを行うと軟腐病等病害発生の原因になりますので、圃場の水分が低下してから行うなど、作業のタイミングを計り、状況に応じて薬剤防除を行います。

べと病の発生しやすい時期です。べと病発生圃場では、そのあと秋にかけて葉枯病（黄色斑紋病斑）が発生する傾向があります。秋の防除対策を見込みながら、計画的な薬剤防除を実施します。また、5月下旬にネギアザミウマの注意報が出ていますので、防除を徹底します。

今回の発行予定日は7月29日(木)です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しています。発行年月日を確認のうえ、最新の情報をご利用ください。

農業普及技術課農業革新支援担当は、地域農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 農薬散布時は、近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬は適切に保管・管理しましょう